

## reProducer Audio Epic 5

取材協力: 有限会社エニシング・ゴーズ、株式会社フックアップ

今春、日本に上陸した「reProducer Audio」は、知る人ぞ知る「United Minorities」の CEO、アティラ・サージェック (Attila Czirjak) 氏によって 2015 年に設立された新興のスピーカー・メーカーだ。ドイツ南西部のプライザハに拠点を置く「United Minorities」は、20 年以上にわたってドイツやスイスのコンサート・ホールサウンド・システム構築/音響デザインを手がけてきた会社で、著名なプロデューサーやサウンド・エンジニアたちにスピーカーやアンプ、マイクロフォンなどをカスタムメイドで製作してきた実績を持つ。そんな「United Minorities」のアティラ・サージェック氏が満を持して立ち上げたメーカーが「reProducer Audio」であり、いま欧米のスタジオ関係者間で、大きな注目を集めている新ブランドなのだ。

「reProducer Audio」の第一弾製品となるのが「Epic 5」とネーミングされたパワード・モニターで、ユニークな形状の筐体にオリジナルの 1 インチ径ツイーターと、5.25 インチ径のウーファーを搭載。加えて底面には 6.25 インチ径のパッシブ・ラジエーターを搭載し、そのコンパクトなサイズからは想像ができないパワフルな低域と広大なダイナミック・レンジを確保している。使用されているオリジナル・ドライバーはすべてアルミニウム製で、非常に速いトランジェント・レスポンスを実現しているのも大きな特徴だ。そこで本誌では、自身のスタジオに「Epic 5」をいち早く導入した音楽プロデューサーの浅田祐介氏に、その実力を伺ってみることにした。

### 海外の作家とのコラボで スーパー・ローの重要性を 再認識した

PS このスタジオではこれまで、メイン・スピーカーは何を使用されていたのですか？

浅田 「Dynaudio Acoustics BM6」を、かれこれ 10 年くらい使いました。「Eclipse TD-M1」もありますが、これ

は導入してまだ半年くらいですね。

「BM6」が気に入っていたのは、歌を録るのがラクだったんです。中域の密度が高く、情報量が多いので、歌の具合がよく分かる。例えば、歌を 4 本くらい重ねたときのピッチのズレ、広がり感は、中域の情報量が多くなると分からないんです。「ヤマハ NS-10M」も同じようなスピーカーだと思いますが、あれは中域の密度が高いと言うよ

りも、意図的にクセを付けて見えやすくしているところがあって。EQ でピークを付けているような、1 ~ 2kHz 近辺がポコッと出ているのが分かる。なのであのスピーカーでずっと作業していると耳が疲れてしまうんですね。「BM6」はそんなクセは無く、情報量が多くとても満足してました。

PS それで今回、「BM6」を入れ替えられたのはなぜですか？

浅田 「BM6」には満足してはいたんですが、海外の作家さんとコラボするようになり、スーパー・ローの重要性を改めて意識したんです。よく、この仕事を始めてかれこれ 30 年くらいになるんですが、日本人の中では太い音を出すプロデューサーだと思っていたんですよ。人からもよく洋楽志向と言われますしね。でも少し前にコラボした海外の作家さんから、「音が細いよ」と言われてしまって(笑)。「お前がパラで送ってくれたトラック、キックにローが全然入ってないんだけど」とか言われて、「え、オレの音って細くてローが無いの？」って凄く焦ったんですよ。でも冷静になって、自分の環境では太いと感じる音が、海外の連中の環境では太く聴こえないということ



ドイツ「reProducer Audio」の初の製品となる「Epic 5」。20 年以上にわたり、ドイツやスイスでシステム設計や音響デザインを手がけてきたアティラ・サージェック氏が満を持して完成させたスタジオ・モニターだ



音楽プロデューサー、浅田祐介氏のプライベート・スタジオ。「Epic 5」は、「Output」のデスク「Platform」にセッティングしてある

は、自分の環境に何か問題があるのではないかと。それでいろいろ考えた結果、スーパー・ローの有無が音の太さに影響しているんじゃないかという結論に行き着いたんです。それが新しいスピーカーを探し始めたきっかけですね。

PS スーパー・ローが必要と言うのは、ダンス系の音楽に限った話ではなく？

浅田 関係無いですね。だってビリー・アイリッシュだって、ザ・チェインスモーカーズだって、ダンス・ミュージックではないですけど、凄くローが入っているじゃないですか。向こうの音楽ってカントリーでもしっかりローが入ってますからね。それは Spotify とかで洋楽と日本の音楽を並べて聴くとよく分かりますよ。日本の音楽だけ極端にスッカスカな音がしますから。もちろん、そういうチャキチャキした音が J-POP の特徴だということも理解しています。海外でも、日本の音楽のチャキチャキした音が好きな人はいますし、それで J-POP のブランディングができていくことは分かる。おそらく音圧を稼ぎたいからローをカットしたいんでしょうけどね。でもプレイリストで洋楽と邦楽を横一列で再生すると、そのショボさが際立ってしまう。ぼくの周りの若いクリエイターたちはその

ことに気付き始めていて、皆んな「やっぱりローを出さないとヤバイよね」となってますよ。なぜスーパー・ローの重要性に気付き始めたかという、若い世代はイヤフォンで音楽を聴くからなんです。ぼくらの世代は未だに最後はラジカセでミックス・チェックしますけど、いまだラジカセで音楽を聴く若い子なんていない。皆んなイヤフォンで、スーパー・ローが出る環境で音楽を聴いているんです。イヤフォンで洋楽と J-POP を並べて聴くと、日

本の音楽のローの無さ、ショボさに本当に驚きますよ。

PS 海外の作家さんとコラボを始めて、そのことを改めて認識したと。

浅田 低域に関しては、2 年くらい前からいろいろ考え始めていたんです。ローがしっかり見えている状態で音圧を稼げるようにならないとダメだなと。ローが見えていないのにマスターにリミッターをインサートして、低域に歪みが生じてしまったら最悪ですから。イージーに「iZotope Ozone」とかをインサートすると、低域が歪んでしまっていることに気付かないんですよ。タイトなスーパー・ローなんだけれども、マスターでしっかり音圧が入っているのが理想だなと、このところずっと思っていたんです。

### Epic 5 は スーパー・ローがしっかり見えて 歌録りに重要な 中域の解像度も十分

PS 新しいメイン・スピーカーとして、「reProducer Audio」の「Epic 5」を導入されたきっかけをおしえてください。

浅田 「reProducer Audio」のことはまったく知らなかったんですが、代理店の方から「試聴しに来ませんか？」と



音楽プロデューサー、浅田祐介氏。1968 年東京生まれ。1995 年にフォーライフからアーティスト・デビューし、4 枚のアルバムをリリース。その後は音楽プロデューサーとして Chara、Crystal Kay、CHEMISTRY、織田裕二、キマグレンなど、多くのアーティストを手がける。近年はミュージシャンズ×ハッカソンやエンターテック系イベントの企画運営も行い、デザイナー YUMA KOSHINO と音楽レーベル「Blind Spot」を立ち上げるなど、活動の幅を広げている。一般社団法人 JSPA 理事。